

【苦屋】とまや(その2)

- ・見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苦屋の秋の夕ぐれ 藤原定家

前回は茶匠の茶道観から見た定家の歌をご紹介しましたが、今回は定家の歌自体を検討していきたいと思います。

『新古今和歌集』所収の「見渡せば…」の原出典は『二見浦百首』で、定家の二十五歳の若作です。

たしか三条西実隆の指摘だったと思いますが『源氏物語』明石の巻の「はるばると物のとどこほりなき海づらなるに、なかなか春秋の花紅葉の盛りなるよりは、ただそこはかとなう茂れる陰どもなまめかしきに」から想を得た歌といわれています。

この歌の情景を『源氏物語』の明石や須磨の海岸に求めることは定家の作意に適うことでしょう。この歌の情景は実景の描写ではなく、『源氏物語』の世界の中のもの哀しさなのです。

定家の代表歌のひとつ

- ・春の夜の夢の浮き橋とだえして峰にわかるる横雲の空

をみても明らかのように定家の歌には読者を古典の世界へ誘導する仕掛けが施されています。（「夢の浮橋」は『源氏物語』の結巻の巻名。「とだえ」は「橋」の縁語。『狭衣物語』巻四「はかなしや夢のわたりの浮橋を頼む心の絶えもはてぬよ」を、「峰にわかるる」は『古今集』壬生忠岑「風吹けば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か」を、「横雲の空」は『新古今集』藤原家隆「かすみつつ末の松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空」を引く）

こうした定家の仕掛けは彼の歌の極めて重要な要素といえましょう。

前回採り上げました『石州三百ヶ条』や『南方録』の影響なのでしょうか、我々茶を嗜む者は「見わたせば…」の歌意を無批判に「侘びの心」と思い込んではいないでしょうか。

定家特有の仕掛けに導かれて私はこの歌に王朝趣味は感じられても「侘びの心」を感じ取ることはできないでいます。

定家の生きた鎌倉時代は珠光の時代より二百六十年も前です。既に貴族・文人たちは隠遁思想や浄土思想の果てに、現世の栄華を否定的に捉え、『方丈記』『平家物語』『徒然草』などの無常観の文学が生まれた時代であります。

未だ「侘び」は単に貧しさ・心細さを意味し美学用語には至っていません。秋のもの哀しい情景歌にも貴族趣味的格調が求められ、次代の田舎趣味的美意識である侘びとは異なるものといえましょう。

そもそもこの歌は茶人たちの期待通り寂しい情景の歌なのでしょうか。

先ごろ亡くなった歌人の塚本邦雄氏の『新古今集新論』に興味深い記述があります。

塚本氏は「なかりけり」の表現を魔王の力と評し「あると強調されたよりもはるかに鮮烈に、花と紅葉のイメージが私たちの心の中に浮かんでくる」と述べています。

苔屋と花紅葉の対比は華やかな暖色の上に透明な寒色を置いた油絵のように互いを活かしあっています。「ない」は決して花紅葉の否定ではなく、むしろ「ある」より強い肯定だと解釈したほうが歌意に適うのではないのでしょうか。

江戸時代前半、茶の湯の世界に古典文学を取り込む風潮に乗って、『石州三百ヶ条』や『南方録』の記述は世の茶人たちの心をそれなりに捉えたことと思います。この歌から古典の引用を取り外し、苔屋と花紅葉の対比を侘茶と台子の茶の対比に当てはめた点は『南方録』の手柄であり、その影響は今もなお続いていると思います。

しかし、定家の本来の歌意は侘び茶の心とは未だ遠く、むしろ『源氏物語』の世界に近いものであり、『石州三百ヶ条』や『南方録』の解釈はあくまで茶人の都合によるものであることを忘れるべきではないでしょう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~